

## 地域通貨とコミュニティ(2)

別府大学 人間関係学科

秋田 清

### I 座談会再開

久しぶりに卒業生が帰ってきた。前回の座談会以降、彼らは、何とか卒業論文を書き上げて、卒業し、それぞれ職についた。案の定卒業できなかったC君を除いて、皆元気に働いている。そのC君も、9月に卒業した。近くに就職した人たちが、「夜勤明け」と言って時折研究室を訪ねてくれるが、5人もそろったのは、久しぶりである。早速前回の「地域通貨についての座談会」の続きをすることにした。

**X先生：**皆、元気そうですね。あなた方のように言いたいこと言っていると、職場では、風当たりが強いんじゃない。

**B子：**多少はね。でも、卒論で先生にいじめられたのに比べれば、どうってことない。陰口言う人もいるらしいけど、そんなん無視してれば済むし。高卒で勤めている人もいて、年は一つ下だけど先輩で、ちょっとやりにくいけど、ちゃんと敬語で話してる、向こうが先輩だからね。

**X先生：**ほう。Bさんが敬語でね。感心、感心。

**D子：**まあ、いやな人もいるけど、良い人もいる。いじめる人もいれば、助けてくれる人もいる。そんなもんですよ。

**X先生：**なるほど。まあ、皆さん相変わらずマイペースで、結構ですね。

### II エコマネー

**A男：**ところで、今回は、時間切れで、中断しましたが、最後の話は、蓄積欲の話でしたよね。

**X先生：**そうでしたね。その話のまえに、Bさん、卒論書いたんだよね。

**B子：**「書いたんだよね」って、自分は関係ない

みたいには言わないでよ。散々いじめておいて。途中で、卒業一度は諦めたんだから。親にも散々説教されて。

**A男：**で、どうなったの？ 「エコマネーは詰まん」なんて言っていたけど。

**B子：**いや、あれは必要ですよ。なかなか良い。

**C男：**なに？ そんなに簡単に考え変えたの？

**B子：**変えたの。いいじゃん、変わったんだから。

**X先生：**まあ、それは良いんですよ。一度言ったら、死ぬまで同じことを言い続けなければいかんと言う考え方もあるけど、それで考え方が深められたり、新しい発見があればよいけど、何もなければ単なる馬鹿ですからね。いずれにしろ、自分で考えることが、大事なことから。

**A男：**それで、どうして変わったの。

**B子：**はじめはね、ボランティアやるのに、わざわざ地域通貨なんか利用することないと思ったし、ヴェーラ・システムとかヴェルグルのスタンプ券とか、不況対策として導入されたものの方が、地域の生活の全体を包摂しているという意味で面白いと思ったの。

**A男：**それで？

**B子：**でも、それは、利子率が低かったり、マイナスの「利子」だったりすることを除けば、法定通貨と大して変わりがないような気がしたの。

**A男：**利子率が低いとかマイナスの「利子」というのは、それはそれで意味があるんじゃない。

**B子：**それはわかるけど。でもね、今の日本のことを考えたら、利子率が低だけで不況が克服できるような気がせんよ。ヴェーラ・システムとか、ヴェルグルのスタンプ券とか、イサカ・アワーズなんかがそれなりに成功したのは、もっと特殊な条件があったんじゃないかなあ。

**C男：**特殊な条件って？

**B子：**産業の発展や市場の広がりやの程度とか、地域の産業の連関とか、それに行政が音頭をとって

地域通貨の価値を担保するものがあつたとか、指導者の資質とか。何よりも自治体など、すでにある組織を利用できたり、一度に大掛かりな組織ができる条件があつたりとかで、できることだと思う。

**C男**：具体的には？

**B子**：そこまでは調べてない。それは今後の課題です（笑）。卒業したし、実際にやる気はないけど。誰か、後輩がやるよね、先生。

**X先生**：どうかな。やってくれる人がいると良いけどね。当分居そうにないよ。ほとんど心理学希望だしね。

**A男**：じゃ、元に戻って、法定通貨とあまり変わらないというのはどういうこと。

**B子**：先生が以前、利潤をどうするかは問題になっていないって言っていたけど、それだったら、不況対策としては成功しているけど。要するに金儲けが基礎でしょう<sup>1</sup>。投機とか信用膨張とか、世界経済の混乱を激しくするものはやめようというだけじゃん。

**A男**：ちょっと乱暴な意見のように思うけど。本質的に、などと言うと、そうなるのかなー。でも、それはそれで意味があると思うけど。

**B子**：いや、意味がないとは思わないけど、生産物の交換はそんなにうまくいかんよ。消費財の生産も販売も世界市場の中で行われているでしょう。地元の小さな個人企業が地元の消費者に製品の販売を行っている場合、たとえば、農産物とか、リサイクル商品とか、電気製品などの修理とか、商店の割引なんかは可能性があると思うけど。

そんなことより、なんか生き方というか、生活の中で何に意味を見出すかということが大事だと思うんよ。

**C男**：それはわかる。卒論で「ネットワーク社会とボランティア」という題目で、「情報社会」って何かを取り上げたんだけど、人々が生活の中で何に価値を見出すかというのが問題ですよ。それが、人と人のつながりを支えていると思うんです。

**A男**：個人の価値観と社会関係とどっちが先なのかな。

**C男**：社会関係というのは、いつの間にか変わってきてると思うんだけど、どこかで人々がそれを感じて、意識化していくでしょう。そして社会に対してこれまでとはちがったかわり方をしていく。

社会奉仕というのは昔から日本にもあつたけど、それとボランティアとは違いますよ。社会奉仕というのは、「社会のために尽くすことはよいことです」という一般的なこと「共同体と個の一体性」が前提になっている。その社会がどんな社会かは問題になっていない。それと違ってボランティアの場合は、先生がよく言われる「貨幣関係を基礎にした近代社会における個の自立」を前提にして、個人がそれとは違った社会へのかかわりをしようとしている。

**B子**：だからね、ボランティアは良いんだけど、うまくいかんのよ。私も時々したけど、1回限りなんよ。エコマネーは、1回限りのボランティアをつなげていくことができるんよ。

**A男**：前回も出たけど、シンボルになる。先生は、「遊び道具」とか「おもちゃ」と言って回っているようですけど。

**C男**：ボランティアのネットワークを体化したのになつて、それを手段としてボランティアが広がっていく。

**D子**：アノー、シンボルとか、体化とか、もう少し具体的に、どんなことなんですか？

**C男**：マルクスの場合は、貨幣を一般的等価形態として規定します。要するに、一般的な交換可能性、それを持っていれば何とでも交換できる証。交換関係のネットワークがそれを生み出し、成員の信頼がそれを支えている。それが法制度として確立されると、強制力が働きますから、一層その一般性は強化される。

**D子**：うーん。じゃあ、その一般的とか一般性と言うのは、どういうこと。と言うか、もっと具体的に、地域通貨の場合はどうなっているのですか。

**X先生**：個別のボランティアは、その都度、相手と自分の特定の関係があることを前提に、特定の個人に依頼します。誰にでも、何でも頼めるわけ

<sup>1</sup> この点について、ゲゼルが利潤を利子として把握していることは、現実の運動にとっては、利潤をどうするかを無視することができたという意味で「好都合」であった。ただし、ゲゼルの「減価する貨幣」においては、利潤の成立する余地はない。

ではない。ところが、地域通貨を介在させると、特定の関係を地域通貨が代位する。特定の関係がなくても依頼することができることになります。地域通貨は一般に会員制です。会員になることですでに一定の合意があります。地域通貨そのものは合意を表すものとなります。社会福祉協議会とか、大学とか組織が介在する場合は、その組織が1回限りのボランティアを仲介することによって部分的には同じ役割をはたしています。

ボランティアをやって、受け取った地域通貨で、受け取った人も、同じサービスだけではなく、他のサービスも第三者から受けることができるわけです。その際、同じ地域通貨を使っているということで信頼関係があるわけです。Mさんに草取りをしてやったから、Mさんから草取りを手伝ってもらえるというだけではありません。しかも、「対価」を支払っているわけですから、ここでは貸し借りをなしです。

ついでに言うと、会員制であることによって、目的も流通の範囲も限定されているというのが地域通貨の特徴です。会員やそのネットワークの統制のもとに置かれ、ネットワークの維持のための手段として使われているにすぎません。貨幣のように一人歩きができないようになっている。蓄積することも利子を稼ぐこともできないわけです。場合によってはマイナスの利子がつく。

B子：だから、そういう関係の中で行われるボランティアのネットワークを基礎にして、有機農法の生産物とかリサイクル品だとか、取り込みやすいものから入れていくのがよいと思うわけ。目的は「コミュニティの再生」です。チャン、チャン。

X先生：ハイ、ハイ。よくできました。

D子：えっ、なに、コーヒー入れてる間に、Bさんのは終わったん。なんか先生、諦めてない？

卒論指導で、いじめ疲れたん？

B子：もういいの！ 「貨幣制度」について理解しとらんって、副査のV先生にも散々いじめられたんだから。

### III 欲求と貨幣

X先生：まあ、まあ。それで、前回の話の続きだけど、利子の話から、貸せるためには蓄えていなければならない。なぜ人は、太古の昔から蓄えるということをするようになったのかという話になって、不慮の事態への備え、欠乏の恐れ、あるいは豊かさへの渴望などの話が出ていました。

A男：その話と少し関係がありますが、リエターの『マネー』<sup>2)</sup>を読んだのですが、議論はずいぶん荒っぽいけど、それなりに面白いですね。

X先生：それは私も読んだ。たしかに荒っぽいね。最後は「陽のお金」国民通貨と「陰のお金」地域通貨とか。あれ、単なる西洋人の東洋への憧れみたいなもので、あまり意味があるとは思えない。

E男：どんな議論をしているんですか？

X先生：道教の「陰陽」思想やユング心理学を利用しながら、考古学的な事柄、中世ヨーロッパのマネーシステムなど多岐にわたります。サブタイトルのとおり、人間がなぜおカネに魅入られるかを論じています。

A男：歴史的な出発点として、「グレートマザー」を取り上げてる。

B子：何、それ。原始女性は太陽であった、なんて話聞いたことあるけど。

A男：紀元前30000年ころから、さまざまな素材で作られた「女神像」(胸と太ももが豊満で、お腹が大きく表現されている女性像)が造られている。これは豊饒と生命の神であったと考えられる。



<sup>2)</sup> ベルナルド・リエター『マネー——なぜ人はおカネに魅入られるのか——』堤大介訳、ダイヤモンド社、2001年。

古くから家畜と宝貝が貨幣として使われていたが、宝貝は女性の象徴であった。古代中国では宝貝をかたどった青銅のコインが使われていたこともある。

**C男**：それは、細かな話はともかく、よく言われていることですよ。でも、それだけだと、豊かさあるいは端的に物をおカネは代表することになりませんか。私は、卒論で「ネットワーク社会とボランティア」を取り上げたので、マルクスの貨幣論をちょっとだけかじったのだけど、彼は、所有が外在化したものではなく、媒介的活動が疎外したものとして貨幣の本質を捉えますね。そういうことからいうと、リエターが言っていることは、それだけではあまりにも一面的だという気がしますが。

**X先生**：C君、「ミル評註」も読んだの？ 感心、感心。でも、リエターの話もそれだけではない。ただ、C君が言ったような問題については、たしかにリエターの議論は非常に弱い。A君、もうちょっと、彼の議論を紹介してよ。

**A男**：ええ、簡単に言えば、女性に対する男性の支配、家父長制的権力構造の中で、グレートマザー一元型心理は抑圧される。そうして、グレートマザーの影（欠乏への恐怖と貪欲さ）が集团的無意識に深く刻み込まれ、この集团的無意識がおカネをつくる。「おカネを蓄積する意志のある人々には褒美（利子）が与えられ、逆にこのマネーゲームに参加しない者は容赦なく処罰されて破産や貧困に追い込まれる」<sup>3)</sup>。

で、リエターは、「利子は『お金を貯めよう』と言う気持ちにさせるために考案された装置である。銀行は、庶民がためたお金を囲い込み、別の人に貸し付けて金利を稼ぐ」<sup>4)</sup>ものとなったと言います。

ところが、これと違ってお金を銀行に預けると保管料を取られるというシステムがある。デマレージ（滞船料）という言葉が、お金への課税を意味していたことが、中世ヨーロッパと古代エジプトにあった。これは長い間忘れ去られていたが、

シルヴィオ・ゲゼルがこれを復活し、1930年代に何度か導入されたことがあったといえます。ここでは、2種類の通貨が流通しており、一つは「遠距離通貨」で、これは貴金属などで作られ、もう一つはデマレージが課せられるお金で、王朝時代のエジプトでは粗末な陶片で、中世のゲルマン地方では薄い板状の銀片で作られ、長期的に保存する目的で製造されたものではなかった。リエターはこれが地域通貨の原型だと言っています。

**X先生**：C君が言ったことと関連して言えば、リエターの場合は、貨幣を機能でとらえていますね。そしてその機能も、マルクス流に言うなら、蓄蔵貨幣と流通手段だけを問題にしている。

**B子**：他にどんなものがあるの？

**C男**：マルクスは、貨幣の機能として、①価値尺度機能、②流通手段、③貨幣としての貨幣を挙げ、③の中に、a貨幣蓄蔵、b支払手段、c世界貨幣を挙げている。だから、さっきも言ったけど、リエターの場合、貨幣を社会関係の体化として捉える視点が弱いですよ。

**B子**：貨幣の捉え方って、いろいろあるんだ。他にはどんなものがあるの？ それと、貨幣を社会関係の体化として捉えるってどんなこと？

**X先生**：Bさんがそんな質問するの？ だって、あなたの卒論のテーマ、「地域通貨」だったよね。

**B子**：いいじゃん、わからんのやから。卒論審査で、ちゃんと副査の先生にいじめられたって、さっきも言ったでしょう。

## IV 関係の結晶としての貨幣

**X先生**：「社会関係の体化」という把握とも関係あるけど、誰か、今村さんの『貨幣とはなんだろうか』<sup>5)</sup>読んでる人いない？

**E男**：それ読みました。貨幣は「死」の問題と不可分だ、というのに引かれて。フロイトの話でも出てくるのかと思って、読んだんですけど、よく分かりませんでした。

**C男**：どんな議論をしてるの？

<sup>3)</sup> リエター、前掲、p.97。

<sup>4)</sup> 同上、p.157。

<sup>5)</sup> 今村仁司『貨幣とは何だろうか』ちくま新書、1994年。

<sup>6)</sup> 今村、前掲書、33頁。

<sup>7)</sup> 同上書、35頁。

**E男**：ここに、今村さんの本ありますよね。ちょっと見せてください。えーとですね。「機能論的観点ではなくて、存在論的観点こそ、本来、貨幣を論じるにふさわしい。なぜなら貨幣は、ものやその機能であるまえに、関係の結晶化であり、われわれはその結晶化の過程をこそ人間の根底から、その根本条件から解釈し理解しなくてはいけない」<sup>8)</sup>と言って、彼はジンメルの貨幣論を援用しています。そして、ジンメルが「貨幣を人間関係の結晶化と見るという独創的な見解を示しているばかりでなく、貨幣をあらゆる現象に結び付けて記述している」<sup>9)</sup>と言います。

**C男**：貨幣を「関係の結晶化」として捉えるという限りでは、マルクスだってそうだし、別に独創的って言うことないんじゃない。

**E男**：そうですね。ただ、諸個人の生の感情や、彼らの運命の連鎖や一般的文化などに対する作用において追求し、しかも国民経済学的な意図を持たないといわれると、マルクスとは違ってくる。

**C男**：国民経済学的な意図を持たない、と言われると、それはもうマルクスとは違う。でも、諸個人の生の感情や彼らの運命の連鎖や一般的文化に対する作用、と言う限りでは、マルクスがそれをどこまで具体的に展開しているかは問題だけど、そういう問題も、マルクスの射程には入っていると言えるんじゃない。

**E男**：多分そういえるでしょうね。それに、今村さんもジンメルの「生の哲学」そのものを問題にしているわけではなくて、「貨幣は、労働と同様に、存在それ自体において、人間的事象であり、人間のあらゆる行為を凝縮した事象である」<sup>10)</sup>ということに本旨があります。

**C男**：それも、その限りでは別に目新しいことじゃあない。誰でも言いそうなことじゃあないですか。

**E男**：そう思います。ただ、「距離化」という概念は、ちょっと違います。かれは「ジンメルの貨幣哲学の原理的位置を占める概念は、距離化である。そしてこの距離化の別名が制度化である」<sup>11)</sup>

と言います。

**B子**：なんか、えらい難しい話になったけど、何それ。

**E男**：Bさんに説明するのか、ちょっと大変ですね。人間は社会の中で生きていますね。その社会生活を捉えるためには、人間相互の関係を考えなければならぬ。その関係づけの原理がジンメルの場合は、距離化だということです。人間の関係づけは、距離を作り出し、同時にその距離を特定の幅の中に収拾することだと捉える。で、「距離化があるからこそ、媒介形式が生まれる」<sup>10)</sup>というわけです。

**C男**：それ、マルクスの「人間は共同的存在」という把握や、「交通」、「分業」の概念とあまり変わらないじゃない。

**E男**：C君のように、共通性を取り出そうとすれば、そうも言えます。ただ、もっと抽象的でしょう。

**C男**：行き過ぎた抽象？ そこまで抽象化すると、なんでも説明できそうな感じだけど、理論としての展開能力があるの？ 何についても、「その原理は距離化である」と言って終わるんじゃない。ジンメルはともかく、今村さんは、何でそんな議論をするの。

**E男**：うーん。

**X先生**：おそらく、貨幣は無くせるのか、という問題関心と関係あるんでしょうね。

**C男**：マルクスの場合は、貨幣の廃棄を問題にしますね。

**X先生**：そう、交換もない状態を想定しますからね。

**E男**：ああ、そういうことですか。今村さんは、人と物との未分離の状態の設定から始めて、それは生死の境のない状態だと言うんです。「距離化は、この状態に楔を入れることで、その結果として死の表象を生む」、「人と物との分離は、生と死の分離でもある。人間は距離化によって、死の観念を内部に抱え込まざるを得ないだけでなく、この観念を制度として客観化する。それが、一方

<sup>8)</sup> 今村、前掲書、46-7頁。

<sup>9)</sup> 同上、47頁。

<sup>10)</sup> 同上、49頁。

<sup>11)</sup> 同上、52-3頁。

では、共同体の墓であり、他方では葬送儀礼である」。さらに人間は「犠牲者をつくり、それを排除したり聖別することではじめて、人間関係の秩序をつくる。その意味では関係の結晶化のなかには、つねに死の表象がまとわりついている。……関係の代表例は、権力と貨幣であるが、権力も貨幣も関係の結晶化であるかぎりには、死の表象と無関係ではない。犠牲の死を操作するものは権力を握り、犠牲者の身体は最初の貨幣形式である。犠牲者の身体が無数の転化をとげたあとで、抽象的な交換媒介者としての貨幣になる」<sup>11)</sup>。

**A男**：そういう議論は、何を明らかにできるんですかね。さまざまな社会関係のなかに、「距離化」とか「貨幣形式」を見つけ出して、「ほら見ろ、この概念こそ魔法の杖だ」と言って喜んでいるような気がするんだけど。

**E男**：なるほど、そういうふうに見れば、今村さんも「媒介形式による事物の結合の無限進行は、社会の実質においては、矛盾の無限進行でもある」と書いてますね。

**C男**：それ、先生が、昔のマルキストの中には、「正・反・合」、これぞ弁証法、なんて馬鹿な話しをして喜んでたとおっしゃってましたが、それと似てませんか？ 何かにつけてすぐに、生産力と生産関係の矛盾だとかいうのも。

**X先生**：おい、変なところでこっちに振るなよ。えーとですね。マルクス本人の場合は、「導きの糸」として、ちゃんと役に立っていますからね。生産力と生産関係の矛盾というのは、それ自体として説明できるものではない。それで完結しているわけではないけど、『資本論』全巻で展開されているという以外にない。一部をとって、例えばこのようなことという説明はできますけどね。弁証法の話は、ヘーゲルの場合は、形式論理学における、形式と内容の分離に対する批判として、内容が形式を作るといってますからね。それを「正・反・合」とその形式だけとって語られるとヘーゲルは怒るだろう、という話です。

**D子**：でも、分かりやすい。

**X先生**：たしかにね。それに体系叙述の際には、



マルクスの場合は、明らかに「導きの糸」になっているし、ヘーゲルの場合は形式だけ見ればそうなっている。ただ、マルクスも言うように、それは具体的なものを具体的に把握するためであって、抽象的な原理をすべての場で確認するためではない。

**E男**：そう言われると、ますます言いにくくなりますが、今村さんは、生と死の媒介という限りでは、墓も貨幣も共通性をもつといわれる。

**A男**：いや、だから、良いんですよ。E君が「貨幣と死の関係」に引かれて、今村さんのを読んだように、それはそれでなんか魅力的じゃないですか。ただ、喧嘩をして、妻が夫に投げた灰皿も、夫婦関係の媒介形式だ、これも貨幣と媒介形式という点では共通性があるなどという話になると、なんのこたか判らん話になる。

**B子**：灰皿はあたったら痛いよ。媒介形式なんかじゃない。

**A男**：ああ、そうか、あたった痛さと心の傷とどっちが大変かと。

**B子**：どっちも大変だよね。私は、あたらなかったら平気だけど。

**A男**：当たらなかったら夫婦関係は回復して、当たったら夫婦関係の墓が立つ。

**C男**：ちょっとついていけませんけど。

**E男**：今村さんは、こう書いています。「素材貨幣と貨幣形式はちがう。現実には、この二つは切り離すことはできないけれども、原理的には両者ははっきり区別しなくてはならない。貨幣形式が肝心なのであり、物的・素材的なものは形式の担い手でしかない」<sup>12)</sup>。

<sup>12)</sup> 今村、前掲書、219頁。

**A男**：「肝心」って、何にとって？ それに「素材貨幣と貨幣形式はちがう」ってどういう意味ですか。貨幣素材と貨幣形式はちがうというのだったら、そんなの当たり前ですよ。

**E男**：関係主義的に貨幣を捉えるから、貨幣形式が肝心と言ってるだけでしょう。「貨幣素材」じゃなくて、「素材貨幣」です。

**X先生**：「素材貨幣」というのは、その本質を「素材的物体とその機能」において捉えられた貨幣という意味でしょうね。C君が言ったように、リエターさんのはこれに近い。今村さんは「伝統的なマルクス主義」も含めて、近代の貨幣理論はすべて素材貨幣論だといっていますね。

たしかに「伝統的なマルクス主義」が、人間労働の一定のエネルギーの支出が直接、価値として物質化するかのようにつけてきたのは馬鹿げていますが、「関係」、「関係」と言っても、それは、何かと何かの関係ですからね。形式だけで人間生きていけませんから。

**A男**：商品交換の関係も、恋愛関係も、生と死の関係も同じじゃあしょうがない。

**X先生**：ええ、共通のものを抽象したければできるでしょうけど。それでは、歴史的・社会的な現実を展開できないでしょう。どこにも「同じ関係」、「媒介形式」があるといえるだけで。

**E男**：先生が言いたいことは、社会関係の問題として捉えることは重要だけど、その基礎にある対自然関係を無視しちゃいかんと言うことですか。

**X先生**：簡単に言えばそうです。

## V 個と普遍性

**E男**：それとちょっとちがいますが、なんとなく関係がありそうな気がしますが、個人の問題をどう捉えるかということなんです。卒論で分裂病を問題にしたのですが、はじめの方では、ハイデッガーやフーコーを利用しながら、分裂病を社会的な「病」として捉えようとしたのですが、やはり「治療」の問題を考えなきゃ、収まりがつかない。いわゆる構造主義の解説書も少し読みましたが、どうしても個人の問題はわたしは残る気がするわけですよ。

**A男**：治療を考えれば、社会に解消するわけにはいかない。

**E男**：ええ、ハイデッガーの「世界—内—存在」というのも、マルクスの「人間は社会的存在」とか、「意識は言語とおない年」というのも、フーコーの「社会的な牢獄」という議論も一応は分かりますが、すべてを社会に解消するわけにはいかない。

**X先生**：だから、木村敏の「間」という概念を引き合いに出して、木村やブランケンブルクが「生きる困難を抱えながらもそこから自由になることを求めて止まない患者に、ある種人間の尊厳を見たのである」というのは、なかなかの名文だった。

**E男**：ごまかしの文章としてでしょう。

**X先生**：いや、そんなことは言わない。さしあたりの結論としてですよ。

**E男**：それですね。個人は肉体を持っていますよね。

**D子**：ごめん、ちょっと待って。私も、卒論で「フロイトの夢分析」を取り上げたので、E君が言おうとしていること面白そうな気がするんやけど、地域通貨の話をしていたんよね。先生、ちょっと整理してよ。

**X先生**：そうですね。さっきも言ったけど、これまでマルクスを基礎にして、近代社会の批判として、貨幣の廃棄ということが語られていたんだけど、貨幣は廃棄できるのかという問題が提起されていますね。

地域通貨の運動を担っている人たちは、貨幣の廃棄を目標として、その過程と考えている人もいれば、そもそもそんなことは問題にしないで、単純に道具として利用している人もいます。

マルクスの「貨幣（の廃棄）」についても捉え方はさまざまです。貨幣は、近代社会における個人の自由の基礎だった。貨幣を廃棄して、個人の自由を確保できるのか、できないのではないか。それに、マルクスの言う「貨幣の廃棄」は、理想として置いておいて、現実批判の基準とするというのは理解できるが、貨幣は廃棄できないのではないか、廃棄すべきではないのではないか、という問題です。そこから、「貨幣」を捉えなおそうという試みがあります。

リエターさんは、貨幣の原型から探ろうとしている。彼自身は貨幣の廃棄なんかは考えていませんけどね。ところが、彼の把握は、今村さんのような問題の立て方をすると、「素材貨幣」の範疇

に入る。でも、今村さんのように「媒介形式」というように考えていくと人間の対自然関係は放って置かれる。

ただ、両者とも近代社会の枠内で貨幣を問題にしているわけではない。そこは気を付けてください。面白いのは、今村さんは、具体的な展開を文学作品の中に求めていますね。リエターさんもシンボルとしての貨幣について論じている。両者とも、社会関係のなかにおける個人の心的態度を問題にしているともいえます。

マルクスは物象化とか物心崇拜について論じています。人間関係が物と物との関係として現れ、物自体、貨幣の素材である金それ自身に特殊な力があると観念され、それを崇めるようになる、ということです。価値形態論では、貨幣が貨幣となる過程を展開することを通して、物神崇拜がどうして生まれるか、その秘密が明らかにされるわけです。

心的態度を問題にしているという意味では、E君が、「貨幣と死」と聞いて、フロイトの「死の欲動」を思い浮かべたとしても、まったく無関係だとはいえない。死の欲動は、攻撃的欲動、破壊の欲動、自己破滅の欲動ですからね。そして何よりも生命（個）と環境の変化との関わりの問題ですからね。

D子：まあ、解らんとは言わんけど、地域通貨との関係で議論されると、私は参加しにくいな。地域通貨については知らんし。E君が考えていることは、地域通貨とは別に議論しませんか。せめて、Bさんが言った「コミュニティ」の問題との関連くらいで。

X先生：なるほど、じゃあそうしましょうか。最初のBさんの話も、コミュニティの再生を目指したエコマネーを基礎に地域通貨は考えるべきだという話でもありましたし。

A男：えっ、そうすると、分裂病などの精神的病との関係で、人間とは何かとか、共同性とは何かというような議論になるのですか？ それは大変だ。じゃあ、そのまえに、さっきのE君の話と関連して、ちょっと気になることがあるので、それ

だけ片付けておきませんか。

D子：さっきの話って？

A男：人間を社会関係に解消することはできないということとの関連で、個人は肉体を持っているということは無視できないという話です。いや、その話は別個に議論しようと言うことは解っていますが、先生が以前、富山大学の公開講座で、エコマネーの加藤敏春さんが、遺伝子の話しをしていたことがどういう関連だったのか気になっていたのです。それはどういう話だったんですか？

X先生：いや、たぶん、A君が期待するような話ではない。加藤さんが、地域通貨について考えていたときに、人間の遺伝子のなかには、利己的な遺伝子と同時に、利他的な遺伝子もあるということを知って、それがエコマネーを発想する基になったという話です。

C男：そういうことなら、何も遺伝子の話でなくても良かったわけですね。だって、先生が講義で、いわゆるスコットランド啓蒙の話に触れておられたけど、そこでも利己心と利他心については問題になっていたわけでしょう。

X先生：いや、そうだけど、それはそれで良いんじゃない。水溜りに移った月を見て、物理法則を発見する人もいたわけだし。U先生なんか、精神分析の問題を考えていて、仏典読んでると、その中にちゃんと書いてあるなんて言っていましたけど。人間の発想って、そんなところありますよ。

A男：それでですね。遺伝子の分析も一段落して、新しい研究の出発点ができたといえるんでしょう。それと、『わがままな遺伝子』<sup>13)</sup>が出て、専門家外の人の関心も広がったし、今度は『やわらかな遺伝子』<sup>14)</sup>という本が出ました。遺伝子と社会関係についてもいろいろ考えることができるようになりましたよね。

X先生：そうですね。中村桂子さんの「生命誌」という捉え方も面白い。生物と環境との関係誌として遺伝子を見ていくというようなことだと思うんですけど。それにちょっと古くなるけど、今西錦司の「変わるべくして変わる」というのも魅力的ですよ。

<sup>13</sup> R.ドーキンス(2003)『利己的な遺伝子』日高敏隆、他訳、紀伊国屋書店、2004年。

<sup>14</sup> M.リドレー『やわらかな遺伝子』中村桂子、斎藤隆史訳、紀伊国屋書店。

<sup>15</sup> K.マルクス『経済学・哲学草稿』岩波文庫、135頁。



**E男**：遺伝子の話はあまり考えていなかったんですけど、先生は何でそんなことに関心もったんですか？

**X先生**：いや、単なる雑学です。まあ、あえて言えば、マルクスが『経済学・哲学草稿』のなかで「死は〔特定の〕個人に対する類の冷酷な勝利のようにみえ、そして両者の統一に矛盾するようにみえる。しかし特定の個人は単に一つの特定の類的存在であるにすぎず、そのようなものとして死をまぬがれないものなのである」<sup>15)</sup>というのが気になっていましてね。

**E男**：どんな関係があるのですか？

**X先生**：単なる類推です。『経・哲草稿』のマルクスは、欲求の対象を外部に持っているという意味で、人間は「受苦的存在」と言います。そして、対象とのかかわりを通した欲求の変化に社会の歴史的な展開の動因を求めます。今の一文は、個と類、個の中にある普遍性への欲求について語ってるともいえます。それとフロイトの「性欲論」や、遺伝子の話と重ねて考えると面白いかなって。

**D子**：もったいぶらんでいいから。聞いてやるから、言ってみて。

**X先生**：もったいぶっているわけじゃなくて、いつものことながら、乱暴だなと思って。

**B子**：はい、はい、それで。

**X先生**：フロイトは「性の欲動」を「生の欲動」だとも言ってますね。性の欲動が生欲動になぜなりうるかと言うと、生命の維持にとって性が占める位置（役割）の問題だと思うのです。これは、個の生と類としての生の両方ある。幼児の性的な快感が、飲むこと排泄すること、つまり個の生命維持と不可分であることは『性欲論』でフロイトが述べています。類としての生命の維持という観点から見ると、個と類との分裂は、両性分離から始まり、そこから個と類との矛盾は展開します。個体は死をまぬがれないが、遺伝子を残すことを通して、類としては存続し続ける。その意味で、類は個体を通してのみ存続し続けることができるのですが、個体はそのなかに遺伝子を引き継ぎ、次世代に伝えることで、類との一体化をそれ自身の中に持っている。その意味で、個体は自らのうちに普遍性を宿し、個体はそのようなものとして個体と類との存続への欲求を持っている。性は個

体が類と繋がる行為です。個体が直接そのように意識するわけではなく、それはただ、性の欲動として個体の中に存在します。性の欲動が生欲動というのは遺伝子の伝播ということで説明するとそのように言えます。だから、性の衝動とは、別の言い方をすると、自らが直接的に全体であろうとする衝動であるとも言えます。個体はそれ自身のうちに普遍的であろうとする欲動を持っています。攻撃欲、破壊欲、支配欲はそのひとつの現れとも言えます。

**A男**：なるほど、一つの説明としては成り立ちますね。たしかに、貨幣の話と直接結びつけるのは無理がありますが。

**E男**：でも、人間は社会的存在といったマルクスも、個人の意欲や意思がなければ何事も起こらない、とも言っていますからね。その個人は社会的存在だと、もう一回言ってみても同じことですよ。個人の問題を問題にしようとする、どうしても、生物学的というか、人間は肉体をもっているということを出発点にせざるを得ないところがありますよね。

「価値形態論」はたしかに貨幣を社会関係の体化したものであり、貨幣物神がどうして生まれるかを明らかにしているわけですが、物神崇拜って人間がやるんですよね。崇拜するのは人間たちですよ。そして、諸個人の活動がそれをつくっていくわけですね。それは「イデオロギー（虚偽意識）」だと言ってみても、それで人間たちは生きているんですからね、なにが「虚偽」か、は絶対的に確定できるものではない。

正常と異常の区別にしても、木村（敏）さんが言うように「共通感覚」という曖昧なものに求めざるを得ない。人間は多かれ少なかれ、分裂病者で、人格障害者なんですよ。

**D子**：あの人ちょっと変よ、なんて言いだすと、みんなちょっと変だったり。それで、みんな共通性を確認して安心したり。

**B子**：先生、いつまで放っておくの。切りないよ。

**X先生**：そうですね。最後の問題は、また次にしましょうか。コミュニティ、貨幣、共通感覚、異常と正常などは関連していますから、日を改めてということにしましょう。今日は久しぶりだから、みんな飲みに行こうか。